

二〇二六年・京大國語 文系・第三問「問題編」

こんにちは。今回は二〇二六年京大國語、文系・第三問(古文)です。本文はやや長いですが、内容も理解しやすく、基本的な文法・単語や和歌解釈に関する定番を知っているかが試される問題でした。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

そのころ、ならの式部卿しきぶきやうのみこと聞こえさせ給へるは、先帝の御弟みにて、今の内の上の御をぢにてぞおはしましける。当代御位の折、\*坊にもゐさせ給ふべかりしを、あやしいはけなくおはしますころより御物の怪になやみ給ひて、常にあつしうのみおはしましければ、その才はかけ離れ給ひぬるに、いと(A)くちをしき御宿世なりけり。この御母御息所みやすどころも世をはやうし給ひ、また御はらからやうの人もおはせざりければ、はかばかしう宮の御後見聞うしろみこゆる人もなく、ただはかなう御覧じける。

同じころ、吉野の奥にいと尊き\*阿闍梨あざりありて、歳は八十ばかりに老いかがまりたれば、ふたたび世に出でじと誓ひつつこもりゐたるを、こよなう\*加持かぢなどしるくありと聞こえたれば、宮も忍びておはしまして、御加持参りこころみさせ給ふ。弥生はじめつ方の事なれば、(1) 名にしおふ花の盛りゆかしう思おもして、多くはもよほされ給ふなりけり。阿闍梨はいみじき\*山のかひともてかしづき奉りて、真心に御加持参り、祈り奉りしけにや、二日三日おはします程に、御心地いとはやかにぞおぼえ給うける。「今までかかる人おはすとも知らで過ぐしけるこそ、わりなけれ。年月\*むもれいたかりし心地の名残なう、例ざまにおぼゆるは、いと尊き事かな。仏の御しるしはこよなかりけるものを。まろもいにしへより本意遂げなんの心深かりしを、日ごろ病にのみ障さへられてなん、(B)くちをしういたづらに世をば過ぐしぬるぞや。さるは、命長らへんためばかりに、(C)頭下ろしなどするたぐひあれど、同じうはかひなきものから、(2) 背くとならばかかる山にもこもり果てて、世

をふたたび見ぬこそ、心もすみで、行ひも一筋にたのもしかりぬべけれ。今はかくてもあらまほしうおぼえて、世に帰るべき心こそせね。さは、やがて御弟子にならばや」など、よろづになつかしう語らはせ給へば、阿闍梨はいとどかしこまりて、尊き経文など説き聞かせ奉る。

\* 寺々の入相<sup>いりあひ</sup>、今日も暮れぬとおどろかすに、霞こめたる花の梢<sup>こずえ</sup>ども、雲も一つにかをりあひて、山風にかつ散りかかる気色は、時知らぬ吹雪かと見えまがふほど、たぐひなうをかしうながめさせ給へり。「とくとく、よそながら思ひおこせしは、ものにもあらず」  
とのたまはせて、

よそながら聞きてしたひし面影は雲にも似ずよみ吉野の花

阿闍梨は「やや」とかたぶきて、やがて御返し奉る。

<sup>(3)</sup> み吉野の山のかひある春待ちて年へし花も色ぞ添ひぬる

(宮部万女『木草物語』より。一部省略)

注(\*)

坊Ⅱ皇太子。

阿闍梨Ⅱ徳の高い僧の尊称。

加持Ⅱ病氣や災難を除くための修法。

山のかひⅡ「山の峽<sup>かひ</sup>」(山と山との間)に、「かいがある」の意味を掛ける。

むもれいたかりしⅡ晴れ晴れとしなかった。

寺々の入相、今日も暮れぬとおどろかすにⅡ「入相」は「入相の鐘」の略で、日没時に寺でつき鳴らす鐘のこと。「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」(『拾遺和歌集』)による表現。

問一 波線部(A)(B)の「くちをし」について、それぞれ誰の、どのような気持ちをあらわしているか、説明せよ。

問二 傍線部(1)を、適宜ことばを補いつつ、現代語訳せよ。

問三 傍線部(2)を現代語訳せよ。

問四 傍線部(3)の和歌は、阿闍梨のどのような気持ちをあらわしているか、説明せよ。

## 【解答】

問一 (A) 作者の、血統も学才も優れた式部卿の皇子が、幼い頃から病に苦しめられていたために皇太子になれなかった宿縁を残念に思う気持ち。

(B) 式部卿の皇子の、病のために昔から抱いていた出家の志を遂げられずにいたことを残念に思う気持ち。

問二 式部卿の皇子は、名高い吉野の花の盛りをご覧になりたいとお思いになって、阿闍梨のもとを訪れた理由の大部分は吉野の桜に心を誘われたのであった。

問三 俗世を捨てるというのであれば、このような山にもすっかりこもってしまい、二度と俗世を見ないのが、心も澄んで、仏道修行もひたすら行え、きっと頼もしいことであるに違いない。

問四 吉野の山の間で仏道修行に励んだ甲斐があつて、式部卿の皇子の長年の病を加持祈祷により治療でき、皇子を仏道に導くことができたことに加えて、皇子と共に美しい吉野の桜を眺めながら和歌のやり取りをすることが、老齡の阿闍梨には光栄で喜ばしいという気持ち。

## 【解説】

問一 (A)(B)「くちをし」

傍線部の心情を説明する問題。なお、**心情説明の問題ではまずは傍線部直線を訳すと解答にたどり着きやすい。**

(A) については地の文であり、素直に作者の心情とする。その上で傍線部直前の「先帝の弟・今上帝の叔父」という血統、「学才に優れた」点と、「皇太子になるはず」だったが幼い頃からの「病・物の怪」のために皇太子になれなかった点をまとめる。

(B) については皇子の台詞であり、皇子の心情と解釈できる。その上で傍線部直前の「昔から出家の志が深かった」こと、「病のために出家できなかった」ことをまとめる。

問二 「名にしおふ花の盛りゆかしう思して、多くはもよほされ給ふなりけり」

現代語訳する問題。方針としては、**文法・単語に忠実に訳しつつ、分かりにくい点があれば言葉を補っていく**。傍線部を直訳すれば「名高い吉野の花の盛りをご覧になりたいとお思ひになって、大部分は心を誘われなさるのであった。」となる。「名にし負ふ」||「名前に背負う／高名な」、「ゆかし」||「見たい・聞きたい・知りたい」、「もよほす」||「誘い出す／促す」などが把握できれば難しくない。後は「主語」と「何の大部分(多く)か」を説明すればよい。主語は**敬語**から皇子であることは分かる。「多く」は文脈判断だが、吉野の阿闍梨のもとを訪れた場面なので、「吉野や阿闍梨のもとを訪れた理由の大部分」と解釈しよう。

問三 「背くとならばかかる山にもこもり果てて、世をふたたび見ぬこそ、心もすみて、行ひも一筋にたのもしかりぬべけれ」

現代語訳する問題。設問条件には「ことばを補いつつ」などがないため、文法・たんごに従って現代語訳すればよいが、**意味が通りにくい箇所は補うとよい**。「(世を)背く」||「出家する／遁世する」、「く果つ」||「すっかりくしきる／くし終える」、「行ふ」||「仏道修行する」、「ぬべし」||「きつとくだろう(強意+推量など)」は基本的な事項であり、得点しやすい問題だったと言える。

問四 「み吉野の山のかひある春待ちて年へし花も色ぞ添ひぬる」

和歌解釈に加えて、阿闍梨の心情を説明する問題。**和歌だけでなく、文章全体の要約の側面もある**と考えることも必要である。「山のかひ」は注にある通り「山の峡」「かいがある」の掛詞だが、前者は阿闍梨が山籠もりをして修行していたこと、後者はその甲斐あって皇子の病を治療できたこと、その結果として皇子を仏道に導き得たことを明示する。傍線部(1)直後の内容も参考にしよう。「年へし花」は表面的には「吉野の桜」を指すが、「年経た」という表現に注目し、「山の峡」も考慮すれば、「老齢の阿闍梨自身」のことを指すと分かるだろう。後は吉野の桜を皇子と見る、皇子と和歌のやり取りをするなど、阿闍梨にとって光栄で喜ばしい内容(「色」)を足せば解答となる。「掛詞」や「見立て」など、**和歌においては「喩え・外的な事物」と「真意・内的な心情」が対になることが多い点も**意識しよう。

## 【現代語訳】

そのころ、奈良の式部卿の皇子と申し上げなさっていた方は、先帝の弟宮で、今の天皇の叔父でいらっしゃった。今の天皇が御位におつきになったとき、皇太子にもおなりになるはずであったのに、不思議なことに、幼くていらっしゃるところから物の怪に苦しめられなさって、いつも病気がちでいらっしゃったので、その学問の才能は（ほかの人々より）かけ離れて優れていらっしゃったのに、たいそう残念なご運命であった。この皇子の母君である御息所も早くにお亡くなりになり、またご兄弟のような方もいらっしゃらなかったもので、しっかりと皇子の後見をいたす人もなく、ただ頼りなくお暮らしになっていた。

同じころ、吉野の奥にたいそう尊い阿闍梨がいて、年は八十歳ほどで、老いて腰が曲がっていたので、二度と俗世に出まいと誓いながら山にこもっていたが、この上なく加持祈禱などの効果がはつきりと現れると評判であったので、皇子も人目を忍んでお出かけになり、加持祈禱をしていただいて、その効果をお試しになった。三月の初めごろのことであったので、名高い吉野の花の盛りをご覧になりたいと思いいなつて、大部分はそのことに心を誘われなさるのであった。阿闍梨は、この上なく山と山との間にこもって修行した甲斐のあることとして、皇子を大切にもてなし申し上げ、真心を込めて加持祈禱をして差し上げ、祈り申し上げた効き目であろうか、皇子が二、三日滞在していらっしゃるうちに、ご気分がたいそうすがすがしくお感じになられた。「今までこのような方がいらっしゃるとも知らずに過ごしてきたことは、まったく残念なことだ。長年、晴れ晴れとしなかった病状がその名残もなく、普段の健康な状態に感じられるのは、実にありがたいことだなあ。仏のご利益は格別なものであったのだなあ。私も以前から出家の本望を遂げてしまいたいという気持ちが強かったのだが、長い間、病気に妨げられてばかりで、残念なことに、むなく年月を過ごしてしまったことだよ。とはいっても、ただ命を長らえようとするためだけに、剃髪するような人々もいるけれど、どうせ同じように出家するなら、むなしなことではあるものの、俗世を捨てるといいうのであれば、このような山にもすっかりこもってしまい、二度と俗世を見ないのが、心も澄んで、仏道修行もひたすら行え、きつと頼もしいことであるに違いない。今はこのままでもいいと思われて、俗世に帰ろうという気持ちがない。それならば、このままあなたのお弟子になりたいものだ」などと、何かと親しみ深くお話しになるので、阿闍梨はいつそう恐縮して、尊い経文などを説いてお聞かせ申し上げる。

あちらこちらの寺の夕暮れの鐘が、今日も日が暮れてしまったと気づかせるころ、霞の立ちこめた桜の梢の数々は、雲と一つになって香りが入り交じり、山風に、次々と花びらが散りかかる様子は、季節外れの吹雪かと思間違えるほどであり、皇子はこの上なく趣深いものとして眺めていらっしゃった。「まったく、まったく、遠くから思い描いていた姿などは、取るに足りないものだ」とおっしゃって、

遠くから話に聞いて慕っていた（吉野の花の）姿は、雲にも似ていないことだ。吉野の花よ。

阿闍梨は「これはこれは」と首を傾けて、その場ですぐに返歌を差し上げる。

吉野の山にこもって修行したかいのある春を待つて、長い年月を経た花も、いつそう美しい色を添えたことだ。